

湿地状態だったこの土地も、住み始めて数年経つと水がたまっているところが増えて見当たらなくなった。歩くとなブツ、ヌブツとしていたのが、今ではフニユ、フニユという程度になった。当初、こんなところで暮らすと湿気で体を壊すのではないかと真面目に心配していたのが嘘のようだ。それにともなう景色も変わってきた。湿地の象徴のようだったガマの群落がまばらになってきたのだ。そしてその翌年には2カ所に数本が見られる程度になり、その翌年には姿を消したのだ。水環境がちよつと変わるだけで植生はこんなに劇的に変わるのに驚いた。同時にガマの特徴的な穂が見られなくなったことに、ちよつと物足りなさを感じた。わがままな話であるが、ガマが消えただけでなくまだ名前も知らなかった草花も種類が減って、数種類のイネ科の植物と、野菊とセイタカアワダチソウとハンゴンソウがやけに目立つようになってきたのだ。以前、植物の専門の方から湿地は陸地と水辺の両方の性質を持つことから、多様な動植物が見られ生物多様性の観点から重要な環境だと聞いたことがある。ああ、それはこういうことなのだとか妙に納得した。

ただ、春先の雪解けの時期になるとそこかしこに水たまりができるのは以前のままだった。それも一ヶ月も経たないうちに消えていくのだが、あるときそれを二階の窓から眺めているとあちこちにある水たまりが連続した点としてひとつの線が見えてきた。造成された土地なので平坦な土地と決め込んで見ているが、そのなかに水がたまりやすい低いところがあることがわかってきた。そういう目で改めてこの土地を見てみるとかつての丘陵の傾斜に沿ってかすかに北側の隅が高くなっていて家を建てたあたりが一番低く、また南の隅にかけて高くなっていることがわかってきた。水準器で計測したわけではないが、人の目でもそのような微妙な傾斜はわかるものだ。それに考えてみれば北の隅から東の隅に引かれた側溝に水が流れているのは、そのような傾斜があるからに他ならない。その時に、北の隅から家の周りを経て西の側溝に流れる川をつくることができるのではないかと閃いた。そうすれば、水辺の環境ができ以前の植生には戻らないにしても多様性は少し回復し、景色も豊かになるのではないか。そう思ったのだ。さっそく妻に提案してみたら、返事は以外にも「良いね」だった。「川ができれば池もできるかもしれない」と妄想を広げたのは彼女の方だった。確かにジベルニーのモネの庭とはいかないにしてもスイレンの咲く池ができたならこの土地にも彩が加わる。それにここは粘土質の土地なので川や池の底に人工的なシートを引く必要もない。

問題は、どうやって川を引くかだ。ウンボをつかって掘れば一週間もかからずにできてしまうが、それはしないことに決めたばかりだ。それに、どれくらい幅と深さの川にすれば水が少ない時期にも川が枯れずにすむか。それには、試行錯誤が必要だと感じた。じゃあどうする。私の手元にあるのは先の尖ったスコップが一丁だけだ。掘る川の長さは少なくとも見積もっても百二十メートルはある。それをスコップ一丁で掘れるのだろうか。

